

2022 年度第三回「文理接続」研究会 2022/07/01 (金) 17:00~19:00 (Zoom 開催)

「エコロジー」をどのように論じることができるのか (3)

これまでのまとめと議論、「エコロジー」の定義について (荒金直人)

【1】 第一回&第二回研究会での発表における各自の観点

1. 井奥洪二「文理接続の観点から論じるエコロジー」

【エコロジーの定義】生物と環境の間の相互作用を扱う「生態学」、生態学的な知見を反映する文化的な活動、社会思想、市民活動、企業活動、サイエンス、テクノロジーなど。

【論点】人類活動の肥大化と環境の間の相互作用について、文理接続の観点から論じてみたい。

- ・ 「環境問題」とは、人類の活動に起因する環境の変化によって生じた問題の総称である。
- ・ 環境問題の原因は人類活動であり、直接的な原因として科学技術を外すことはできない。しかし、環境問題の解決に科学技術が必要であることも事実であろう。科学技術の方向性と使い方を決めるためには人文社会学的アプローチが必要である。①既存の技術、施設、設備の活用法を発想し利活用を進める。②グローバルマーケットをできるだけ利用しない。③適材適所の DX。過度に進めず人権を守る。④SDGs の意識を高める。⑤全世界で軍縮を進める。

2. 見上公一「気候工学と「エコロジー」——人新生における自然と人間の境界線」

【エコロジーの定義】生態系の理解としての生態学、生態系の保護としての環境保護運動。⇒理解・保護の対象としての「生態系 ecosystem」の存在が前提されている。

【論点】人間はシステムの「外側」に位置付けられるのか。生態系の保護は「浄化」すなわち人間の影響の除去によって実現されるのか。

- ・ 人新世という地質年代区分の提唱。人間の影響は既に地球システムのあり方を変えた。浄化を諦めるべきなのか。システムの再構築が要請されているのか。
- ・ 気候工学、「人間活動起源の気候変動の影響を弱めるための惑星環境の大規模操作」を目的とする技術。二酸化炭素除去と太陽放射管理による、気候変動に対抗するための環境システムへの人為的な介入と改変。旧来の「エコロジー」との共存は可能なのか。⇒何が生態系というシステムの「内」に位置付けられ、何が「外」に位置付けられるのか。

3. 荒金直人「エコモダニズムとラトゥールのエコロジー思想」

【エコロジーの定義】環境問題への思想的対応。

【論点】「エコモダニズム」との距離を測りつつ、ラトゥールのエコロジー思想を、政治と科学についての考察を中心に整理する。

- ・ リュク・フェリーは、『七つのエコロジー』(2021)の中で、後ろ向きで懲罰的なエコロジー思想に反対し、技術革新と政治力による前向きな解決を目指すエコモダニズムを支持する。
- ・ 「エコモダニスト宣言」(2015)によると、エコモダニストたちは、技術と政治の力で経済発展と環境保護を上手く分離して両立させることができると考える。その一方で、我々が「自然」と呼ぶものは既に何千年

にもわたって人間によって改変されてきたものであり、環境は多様な地域的・歴史的・文化的選択によって形成されたものであるという点も確認される。

・ 『地球に降り立つ』(2017)と『新エコロジー階級についてのメモ』(2022)におけるラトゥールの論点。地球システムは人間の行為の枠組みではなく、それ自体が行為者である。環境問題に対応できる政治的な力を形成する必要がある。工業生産の論理ではなく生命産出の論理で考察することが重要である。地球規模での居住可能性が問題なのであり、グローバルかローカルかという問題ではない。科学の知見は極めて重要であるが、客観的自然の名の下で政治的議論を封じるべきではない。

・ エコモダニズム宣言とラトゥールのエコロジー思想との間に矛盾はないように思われた。ただし、前者が表明するある意味で現状追認的な楽観主義と、後者が描写する世界観の大転換の間には、やはり違いがあると感じる。(※ラトゥールの別の著作『ガイアに直面して』(2015)の中で、エコモダニズムに対する批判的な言及がある。発想の転換をせずに、とにかく前進して解決しようとする、近代主義に特有の姿勢に対して、ラトゥールは批判的である。)

4. 宮本万里「環境人類学の視点から、環境と人の営みを考える」

【エコロジーの定義】①生態学という意味でのエコロジー〔文化生態学、政治生態学、歴史生態学〕。②自然環境保護という意味でのエコロジー〔環境主義、環境保護のための政策、運動〕。③人々の生活の中のエコロジー〔生態環境に応じて暮らしてきた人々（農業・牧畜・狩猟採集）にとって、環境を守るとは何を意味するのか〕。

【論点】全体論的なアプローチを採る学問としての人類学は、人間と環境の相互作用の複雑さを探求するために、現地の個別の事例を通して、政治的、文化的、経済的要因の相互作用を同時に理解しようと試みてきた。

・ ここでは、環境保護を国是としてきたブータン王国の自然保護区にある村落社会を対象とする。国家の開発政策および自然保護政策が、農牧社会の生業、人と動物の関係性、生態環境そのものにもたらす影響を分析し、ヒマラヤの山岳民にとっての「エコロジー」とは何か、そして彼らにとっての「よりよい生」とは何かを考える。①近代化と経済開発。②森林保護政策による野生動物との距離・関わりの変化。③生業と住処、家畜との関わりの変化。

・ 環境保護政策の中で、家畜と共に生きる生活の断絶、季節に応じた移動の停止、仏教儀礼の肥大化と動物供犠の否定が進む。山の神々への畏れの喪失と、自然を飼い慣らす思想の極大化が起こりつつあるのだろうか。その先に生まれる環境と人間との新たな関係性は、どのように切り結ばれるのか。

5. 縣由衣子「ミシェル・セールの『自然契約』と『作家、学者、哲学者は世界を旅する』をめぐって」

【エコロジーの定義】人間と自然の関係についての哲学的考察。

【論点】ミシェル・セールの思想を手掛かりに、自然の捉え方を検討する。

①人間同士の闘争関係〔主体的暴力〕はある種の社会契約を前提としている。それに対して自然との闘争関係には法的前提がない〔客体的暴力〕。しかし、この客体的暴力とも何らかの形で契約〔自然契約〕を結ばなければならない。この自然契約は、自然に対する人間の寄生的関係であってはならず、

自然との共生と相互性から成るものでなければならない。

②しかし、契約関係に入るべきこの「自然」なるものが何であるのか、そして「人間」なるものが何であるのか、それらはどのように変化してきているのか、このことについて考えることから始めなければならない。セールは、デスコラによる文化の四分類（ナチュラリズム、アニミズム、トーテミズム、アナロジズム）を、西欧文明の中に併存しているものと捉え、自然と人間を捉える視点の多様性を強調する。

6. 小菅隼人「舞踏とエコロジー」

【エコロジーの定義】自然環境と社会環境の緊張関係の中で、舞踏する身体の固有性と普遍性について考えること。

【論点】土方巽（1928-1986）は日常（自然環境、体内環境、社会環境）の中に埋没して意識されなくなった身体を「飼い慣らされた身体」と表現し、身体は社会環境と自然環境の緊張関係の中でその意味が見出されていくものだと考えた。舞踏（「暗黒舞踏」）は、その緊張関係を作り出すための手段であった。今回は特に、土方における自然環境と身体の間を、田舎と都会、local と universal、固有性と普遍性という対立軸で考えてみたい。

身体はとりわけ出生地（土方なら東北）の自然環境によって規定されている。

ビショップ山田の率いる「北方舞踏派」の鶴岡市での公演『塩首』についても考えてみたい。田舎の固有性とは異なる、異物としての舞踏の固有性を、そこに見ることができる。

7. 高山緑「人の生涯発達とエコロジー」

【エコロジーの定義】人の生涯発達に影響を与えるミクロまたはマクロな物理的または社会的条件。

【論点】人間は、機能が低下したり、リソースが縮小したりしても、必ずしもウェルビーイング（幸福感）は低下しない。低下、縮小、変化へ適応しながら生きている。ウェルビーイングには、どのような要因が関係するのだろうか（個人的要因、社会的要因、地域要因、環境要因）。特に、ソーシャルキャピタル（ソーシャルネットワーク及びそれが生み出す共通の価値観、規範、理解）は、精神的健康・身体的健康・死亡率に関係する。物理的・社会的・地域環境を整えることで、幸福感は維持される。

⇒生涯発達プロセスを個人レベル、ミクロな環境レベル、マクロな環境レベル、の視点から捉えることの必要性。

8. 寺沢和洋「文理接続×エコロジー×宇宙（放射線）」

【エコロジーの定義】①環境と生物との相互関係を研究対象とする学問である生態学。②地球環境や自然と、人間や動物などの生態系との間の調和や共有を念頭に置いて、人間社会の持続可能な開発や経済発展を目指す考え方。／自然環境保護運動。人間も生態系の一員であるという観点から、人間生活と自然との調和・共存を目指す考え方。特に「ディープエコロジー」とは、環境危機の根本原因を自然に対する人間の恣意的で暴力的な態度に求め、その源泉として近代科学に代表される人間中心主義的な自然観を批判する考え方。⇒要するに、生物〔の変化〕と環境〔の変化〕の相関を考えること。持続可能性、つまり全体に影響しない程度での各部分の少量の変化を容認する発想が必要。

【論点】宇宙飛行や、月や火星での活動における、宇宙環境〔特に宇宙放射線〕への対応についての考察。コロナ禍との比較など。

【2】以上の八つの観点の整理

- ・ 「エコロジー」の定義とその多義性については既に多くの指摘がある。この多義性について確認しておくことは重要であるが、定義を統一する必要はないのではないか。
- ・ 「エコロジー」の定義よりむしろ、「エコロジー研究」の定義について、ある程度の共通認識を確認しておく必要がある。

我々にとっての「エコロジー研究」とは、人間と環境の関係についての問題意識に基づいた研究のことであり、以下のような問いに答えようとするものである。

人間と環境の関係を…

A. 現実問題としてどのように調整・改善すべきか？

環境科学の観点から（井奥）

老年学の観点から（高山）

B. 具体的事例に基づいてどのように理解すべきか？

科学技術社会論の観点から（見上）

人類学の観点から（宮本）

舞踏研究の観点から（小菅）

放射線学の観点から（寺沢）

C. 哲学・思想を手掛かりにどのように把握すべきか？

ラトゥールと「近代性」という観点から（荒金）

セルと「人間と自然」という観点から（縣）

【3】以上のことに関して、意見交換と議論

- ・ 各自の発表の論点の確認、補足など
- ・ 「エコロジー」の定義についての確認
- ・ 我々の「エコロジー研究」の方向性についての議論

〔以上〕